これからの国民体育大会の発展に向けた一考察

A Study for development of National Sports Festival in the future

1K07B215-8　　山﨑　絵理

指導教員　　主査　作野　誠一　先生　　副査　木村　和彦　先生

【緒言】

筆者が国民体育大会(以下、「国体」と略す)に関心を持ったきっかけは、2003年の静岡国体に出場したことである。国体は、単に勝敗を争うだけの大会ではなく、中学3年生からトップアスリートまで出場することのできる日本最高峰の大会で、スポーツ自体を楽しみ、人との触れ合いを実感できる祭典であると感じ、今後の展開に関心を持った。

しかし、国体について研究を進めていくと、財政面や天皇杯獲得をめぐる問題について、国民の間に不信感が募っていることが明らかになった。そこで、これら諸問題の歴史的背景、経緯、対策などについて検討する中で、今後の国体のあり方について提言している「新しい国民体育大会を求めてー国体改革2003ー」（以下、「国体改革2003」と略す）の存在を知った。この提言は、その後の国体における評価の観点であり、また、これからの国体のあり方を検討するにあたってとりわけ重要な意味を持つと考えた。

2002 年高知国体においては、財政面の削減や、天皇杯至上主義を改め、身の丈にあった国体であったという評価もあるが、その後の国体のあり方や「国体改革 2003」に影響を与える大会となったのかについても検討する。

以上より、本研究では、主に「国体改革 2003」以降の大会を対象として、提言された改革の実施状況を検証するとともに、改革の阻害要因や今後の課題について明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

まず、先行研究から国体の歴史や現状を明らかにする。また、「国体改革2003」が策定されてからの実施状況等について情報を収集するため、日本体育協会国体推進部国体課担当者へ面接調査を行った。2002 年高知国体については、当時の高知県知事・橋本大二郎氏への面接調査により、国体の簡素化に努めた具体的な経緯や試み、開催県からみた国体の課題等を明らかにする。

【結果と考察】

国体推進部国体課担当者の面接調査によると、「国体改革 2003」の実施状況は、参加者数の削減や組合せ抽選会といった、目標としていたものが殆ど達成された項目と、トップアスリート・中学3年生の参加拡充、所属都道府県、審判の判定、広域開催についてなど、現在も取り組んでいる段階の項目が多かった。また、正式競技とは別に実施されているデモンストレーションスポーツやイベント事業は、開催県民を中心にスポーツ普及に貢献する取り組みであり、これからより国体に馴染んだものとして周知させていく必要がある。国体はメディアの露出が少なく、広報活動が充分ではないが、「国体改革2003」の中にも書かれているように、5年毎の見直しにより継続・改善していくことで、時代に適応した祭典になるのではないかと考える。

橋本氏への面接調査では、施設設備をはじめ、財政的問題などがあったことが明らかになった。時代の変化に応じて、国体は財政的削減を図り、さらにトップアスリートの参加が減少している中で、国体は単なるイベントなのか競技としてのスポーツ大会なのか、区分けが必要な時期にある。また、高知県は地元にある施設等を活かし、県民の協力によって予算を抑えるなどの努力をすることで、県民や地域スポーツが活気づいたようだ。今後、国体を発展させていくためにも、「国体改革2003」にも掲げられている大会規模の見直し、財政面の調整は重要な鍵を握ると考える。

【提案】

国体は、参加者数の削減が進む中、トップアスリートの参加も減少し、莫大な財政負担を抱えて国際級の施設をつくる意義があるのか疑問視されている。必要に応じて施設基準のレベルを下げ、選手だけではなく大会後に地域の方々にも役立つ施設づくりを手掛けるべきではないだろうか。また、中学3年生の参加拡充を進め、ジュニア層の強化に力を入れている国体は、少なからず選手強化費が出るため、日本の競技力を上げる絶好のチャンスであり、重点的に力を入れていく意義があるのではないかと考える。

国体は、選手だけが主役ではない。開催県民の協力が大きな支えとなり、観戦者も日本最高峰のスポーツ大会から得るものは大きいだろう。今後、「国体改革2003」は開催県が天皇杯を獲得するというおかしな慣習を払拭するためだけの改革ではなく、選手の強化、競技施設の充実、見るスポーツ、支えるスポーツとしてのスポーツの普及に焦点を当てた改革としてこれを進めていくことで、国民の新たな関心を集めることができるのではないだろうか。